

海の近くでみつけた変わった形の樹木たち



文と写真◎萩野 裕章 Hagino Hiroaki

東北支所

千葉県九十九里海岸

飛砂と潮風を受け続けて樹冠の形状が
変わったハマヒサカキ。

日本では、様々な樹木が生育しています。海の近くにも、自然に存在する樹木もあれば、人が潮風や飛砂（砂浜から飛んでくる砂）を抑える目的で植えた海岸の防災林、さらに景観を良くする目的で植栽した樹木などがあります。海岸の近くは植物にとって生育が容易ではありません。砂地であれば乾燥しやすく、強風が吹くと海からの塩分や飛砂の影響を直接受けます。

海岸付近の樹木を紹介しましょう。代表的なものでは全国に分布するクロマツのほか、北・東日本に多いカシワ、本州の太平洋側や西日本に多いトベラ、マサキなどがあります。これらは普通の環境であれば他の樹木と比べて特に変わった形は見られません。しかし海岸付近で、直接海からの潮風を受けるような場所では大きく変わった形になります。

潮風の影響を受けた樹木の形に共通することです。同じ木でも風上側に位置する葉は飛砂や塩分で傷つけられて枯れてしまい、残っていたとしてもその数はわずかです。しかし風下側になると徐々に枝葉の数を増やしていきます。風上側の枝葉が強風に対して楕円となり、風下側への影響を少しずつ小さくしているからだと考えられます。

どのくらいの潮風が吹くと樹木の形が変化するかについては、よくわかっていません。ただし飛砂や飛来する塩分の影響が大きいと樹木は枯れてしまうことが明らかなので、その対策として防風柵や防風ネットを設置することが推奨されています。塩分や飛砂など海岸特有の環境と樹木の生理現象：形態変化の関係は、今後ぜひとも明らかにしていきたい課題です。♣

神奈川県湘南海岸

防風ネット内陸側の広葉樹のようす。
防風ネットのおかげで健全に生育している。

千葉県九十九里海岸

強風で、斜めになった
樹体を土塁の支
えて育つトベラ。